

特集：豚由来 *Pasteurella multocida* の薬剤感受性*

A Symposium: Antibiotic susceptibility of *Pasteurella multocida* isolated from the pigs

今回のシンポジウムにあたって

佐藤 静 夫 (全農家畜衛生研究所)
高橋 勇 (日本獣医畜産大学)

Pasteurella の薬剤感受性に関しては、本会の第7回シンポジウム (1980年) で、*Haemophilus* とあわせて取り上げたことがある (要旨は会報第2号に掲載)。

その当時は、まだ国内における本菌の薬剤感受性についての報告が乏しく、特に *P. multocida* に関しては、ディスク法による成績に限られていた。しかし、その後この分野の研究が進み、培地希釈法による感受性成績もいくつか報告され、一方では薬剤耐性菌の出現増加も報告されるに至った。

そこで、今回は再び *P. multocida* の薬剤感受性の問題を取り上げることとした。今回のシンポジウムの企画にあたり、特に意を用いたのは次の2点である。まず第一点は、本菌の血清学的分類に関する研究は、近年かなり進んだが、その分類方法や血清型の名称が研究者により異り、それらの相互関係など一般人には理解し難い点がある。また血清型と動物に対する病原性の関係ならびに疾病の呼び名についても、異った見解がある。そこで、シンポジウムの最初に、この方面の専門家である沢田拓士氏 (農水省動薬検) に、これらの問題と国内における本菌の感染症の動向について総説していただくこととした。第二点は、本菌の薬剤感受性の測定法については、これまでは一定の基準がなかったので、今回の各演者の成績発表時に、その測定法を詳しく述べていただき、この問題を薬剤感受性や耐性の問題とあわせて討論し、できれば当研究会で本菌の薬剤感受性測定法を標準化したい、という狙いであった。

今回のシンポジウムにおける討論の結果、感受性測定法に関し、いくつかの問題点が浮び上がってきた。そこで、これらの問題を検討するため、小委員会を結成して討議を行った。その結論と関係資料をシンポジウムの講演要旨の末尾に「追加資料」として掲載し、今後、本菌の薬剤感受性を測定する場合の標準法として各位のご参考に供することとした。

* 本特集は1989年4月5日に開催された本会の第16回シンポジウムの講演要旨である。